

美浜の会 ニュース

No. 110

2010. 12. 25

美浜・大飯・高浜原発に反対する大阪の会 (代表) 小山 英之
大阪市北区西天満4-3-3 星光ビル3階 TEL 06-6367-6580 FAX 6367-6581 郵便振替: 00950-6-308171 (美浜の会)
⇒ ホームページURL <http://www.jca.apc.org/mihama> ⇐

頒 価 300円
購読料 年2千円

高浜3号プルサーマル起動糾弾!

玄海3号の燃料漏えい調査結果は1月20日頃に判明

各地の運動は連携し、結束して プルサーマルを止める準備にとりかかるう!

12月22日、関西電力はついに、多くの人々の反対を押し切り、使用済MOX問題や玄海3号の燃料漏えい等の深刻な問題に封印して高浜3号プルサーマル炉の起動を強行した。このことに強く抗議する。25日に発電を開始し、1月末には本格運転を始めようとしている。

しかし玄海3号プルサーマル炉で起きた燃料からの放射能漏えいは、この間の政府・電力一体となって強行してきた暴走プルサーマルにストップをかける大きな契機となる可能性がある。漏えいはMOX燃料で起こった可能性があり、九電の調査結果は1月20日頃に明らかになる。それに備えて、各地の運動は一層連携を密にして、反撃の準備を整えよう。

●高浜プルサーマルに反対する福井と関西での多彩で緊迫した活動

玄海3号の燃料漏えいを契機に、各地の運動は一層連携を強めていった

福井と関西の運動は、9月以降9回にわたって高浜町を訪れ、全戸へのチラシポスティングや戸別訪問を行い、町の人達に若狭が核のゴミ捨て場になると訴え対話してきた。使用済MOXは青森に行くと言っていた町の人達の中に、孫子の代まで核のゴミが居座り続けることへの不安や嫌悪、関電からも県や町からも知らされずにいたことへの憤りの気持ちが静かに広がっていった。起動直前の20・21日も「今がとても大事なときです。高浜町の将来は皆さん一人ひとりの手で町と県に伝えましょう」とのチラシを配布して回った(19・20頁参照)。起動翌日23日の地元各紙はこぞって、使用済MOX問題と玄海3号の燃料漏えいを心配する町の人達の不安な声を具体的に掲載した。

11月には、福井・関西一円の11団体が「MOX装荷に反対する緊急要望書」への個人賛同を呼びかけた。わずか2週間余りで3344名もの個人賛同が寄せられた。インターネット、母親仲間、職場、地域、街頭、集会等で精力的に集められた。締め切り最終日の11月24日には千名の署名が、FAXで、速達で、持参して届けられた。翌日には福井県へ、26日には高浜町へ提出した。関西でもプルサーマルに反対する声は徐々に広がっていった。共に活動する仲間が増えていった。起動当日の22日午前には、関電プルサーマル広告が誇大で虚偽だとして、89名の連名でJARO(日本広告審査機構)に苦情を申し立てた。

同時に11月には、グリーン・アクションと共同で行っている関電交渉で、高浜3・4号の使用済燃料貯蔵プールに臨界の危険性があることを追及していった。関電がプールの臨界安全

評価で「参考」にした米国の規格に従えば、臨界の危険性があることが明らかになった。12月18日には、三度目の要望書を県と安全専門委員に出し、慎重な検討を求めている。

高浜プルサーマル原子炉起動の直前、12月9日には日本初の玄海原発3号プルサーマル炉で燃料から放射能漏れが起きた。MOX燃料からの漏えいの可能性があり、同じメロックス社製のMOX燃料を使用する高浜プルサーマルに対する不安と批判の声は高浜町でも広がり、そしてプルサーマル開始の延期を求める声が主に関西から、そして全国から、電話やFAX、知事宛メールで福井県に殺到した。当会のHPを通じた知事宛メッセージだけでも、9日間で120通以上のメッセージが福井県に送られた。

このように秋からの闘争では、たび重なる高浜訪問と、自分たちの足場である関西で「MOX装荷にSTOP」を求める緊急署名への個人賛同を通じて運動が拡大していった。MOX装荷に反対する「緊急要望書」、玄海3号の燃料漏えいを受けた「緊急知事宛メッセージ」、「緊急JAROへの苦情申立」等々、情勢の変化に応じて、多様な取り組みを行ってきた。12月5日にMOXが装荷された後も、怒りと悔しさ、同時にこれまでに得た力をバネにしながらか、そして9日の玄海3号燃料漏えいが起こったことによって、活動は再活性化した。関電のプルサーマル起動を阻止することはできなかったが、地元での不安や憤りは表面化し始め、関西での運動は徐々に広がっていった（12頁参照）。

そして福井・関西の運動は、裁判を構えた佐賀・九州、耐震安全性の問題でプルサーマルが延期となった静岡・愛知、さらに愛媛、福島、首都圏、六ヶ所再処理工場に反対する各地の運動と連携し、素早い情報交換や連携プレーに支えられてきた。

玄海3号の燃料からの放射能漏れという新しい局面では、佐賀・九州では連日の街頭行動や九電、県などへの申し入れが精力的に取り組まれている。「原発さよなら四国ネットワーク」は12月17日、伊方3号プルサーマル停止等を求めて愛媛県と四国電力に申し入れを行った。各地の運動は連帯を強め、刺激しあいながら活性化している。25日には「原子力発電に反対する福井県民会議」の呼びかけで、高浜原発ゲート前で抗議行動が行われ、私達も参加した。玄海漏えい問題、使用済MOX問題に取り組むことを福井の参加者とともに改めて確認した。

これまでの運動を土台として、玄海3号問題に焦点をあて、一日でも早くプルサーマルを止めるために準備を開始しよう。運動の中で浮かび上がってきた課題を整理し、来年に備えよう。

●玄海3号の燃料漏えいの調査結果は1月20日頃には判明する

最大の焦点は、玄海3号の漏えいがMOX燃料からかどうかにある。12月9日に一次冷却水中のヨウ素濃度が上昇し、九電は「社会的関心が高い」ことを理由に翌10日から原子炉を停止した。九電の12月22日のプレス発表では、1月8～12日に燃料を炉心から取り出し外観検査を行い、13日から1週間程度で漏えい燃料集合体を特定する SHIPPING 検査を終えるという。1月20日頃には漏えいがMOX集合体からかどうか判明する。高浜3号の本格運転は1月下旬だ。佐賀・九州の運動は、調査の透明性と結果を即刻公表するよう要求して、九電や佐賀県、玄海町、保安院現地事務所等に働きかけている。

玄海3号炉には193体の燃料集合体が入っており、その内MOX燃料は16体である。割合は低いものの、MOX燃料から漏えいした可能性がある。それは第一に、MOX燃料固有の性格による。MOXの場合、核分裂生成ガスがウラン燃料より多く出るため、初期に燃料棒に入れるヘリウムガスを少なくする。そのため、運転開始半年過ぎで燃料棒と支持格子の間に隙間が生じ、水流によって燃料棒が振動し支持格子とこすれて燃料棒に孔（あな）があく。第二に、メロックス社製MOXの製造上の欠陥がある。昨年来問題にしているペレットの蒸発性不

純物問題が関係してくる。とりわけ玄海の場合は、それを見越して初期ヘリウムガスを当初予定よりさらに低くしている可能性がある。このような状況からか、九電は、プルサーマル炉だけヨウ素濃度の監視を週4回とし（他は週1回）「監視強化」していた（5頁参照）。

漏えいがMOX燃料からとなると、玄海3号にとどまらず、同じメロックス社製MOXを使用している高浜3号、伊方3号のプルサーマルにも波及する。高浜町の副町長は、22日の起動時に「町にとっても悲願」としながら、玄海3号の燃料漏えいについて「原因究明が現在行われているため、今後報告を受けて判断していきたい。高浜3号で不都合な問題が出た場合は、事業者に的確な対応をとってもらおう」（22日福井新聞）と述べている。

さらに、プルサーマルが狙われている各地でも、燃料製造は当面メロックス社しかない。メロックスの欠陥MOXの使用禁止が共通のスローガンとなる。

各地で学習会や討論会を組織し、電力会社との交渉、県や町との交渉を通じ、情報を公開させ、機敏に情報を交換していこう。保安院交渉なども準備していこう。

●地元に居座り続ける使用済MOX 町の人々の驚きと憤り

核燃料サイクル政策は、「資源の有効利用」「リサイクル」と称しているが、その実は、核のゴミ問題を先送りするためのものである。その矛盾の集中点が、処理の方策も決まらない使用済MOXだ。高浜町の総務課長は11月26日の申し入れ時に「今後40～50年間は高浜原発プールで保管することになる」と初めて具体的に語った。その後どこに持って行くのか、処理の方策も何も決まっていない。原発が閉鎖になった後まで、孫子の世代が核のゴミに脅かされる。米国の現状では、老朽化した原発プールから微量の漏えいが続き、原発周辺の環境を汚染し社会的に大きな問題となっている。

戸別訪問のチラシ入れを通じてこれらのことを知った高浜町の人達は、驚きと同時に、都合の悪いことが隠され続けていたことに憤っている。原発関連で勤める家庭が多い地元で、庭先から高浜原発が見え、原発を受け入れざるをえなかった町の人達の中から、自分の町に「カスが残る」というプルサーマルの醜い本当の姿を知って、不安の気持ちが表面に出始めている。

地元では、隣の人とも原発に批判的なことを話すことがはばかれる状況がある。私達は、町の人に事実を伝え問いかけ、返ってきた町の人達の言葉をそのままチラシで知らせていった。

「心配しているのは、あなただけではない」と。電気の消費地関西からの参加者は、現地を自分の足で歩き話しをして、改めて原発・プルサーマルの問題を身近なものとしてとらえている。今後も、「プルサーマルを心配するふつうの若狭の民の会」等と協力し、継続して取り組んでいこう。人々の意思是、最も深いところから、重しとなって関電に跳ね返っていくに違いない。

●高浜3・4号炉使用済燃料貯蔵プールに臨界の危険性あり

高浜3・4号プールは、六ヶ所再処理工場が行き詰まり使用済燃料を搬出できないこと、及び燃料の高燃焼度化のしわ寄せが、臨界の危険となって現れるまでになってきている。リラッキング（ぎゅうぎゅう詰め）によって、例えば3号機プールのAエリアだけで、それまでの貯蔵能力の約2倍にあたる1240体、炉心内にある157体の約8倍の使用済燃料を貯蔵可能とした。貯蔵プールは格納容器の外にあるため、臨界事故が起こればルテニウム、セシウム等の放射能が容易に外部に放出される。臨界事故は決して起こしてはならない。しかも、そのように危険な貯蔵プールに、使用済MOX燃料をほぼ永久に貯蔵することになる。

11月25日の福井県へのMOX装荷を認めないようという「緊急要望書」提出時に、こ

の問題を慎重に検討するよう申し入れた。安全対策課の課長は、関電に回答を求め、資料を提出するよう求めると明言した。その回答は県の安全専門委員にも渡し、私達にも関電から渡すようにすると約束した。その後、保安院への質問書提出、国会議員へのレクという形で行われた11月29日の保安院からの説明、12月2日に関電から1枚の資料が出て、9日の関電本店での説明会と続いていった。

これらを通じて、高浜原発の使用済燃料貯蔵プールには、臨界の危険性があるということが明らかになった。関電が臨界評価の「参考」にした米国の規格(ANSI/ANS-57.2)を適用すれば、関電が安全評価に用いた数値のままでも臨界の危険性がある。関電は自らに都合のいいように米国の規格をねじ曲げて安全だと主張するが、関電の独自の評価方式には根拠のないことが明らかになった(16頁参照)。グリーン・アクションと共に、12月18日付けで福井県と安全専門委員に三度目の要望書を出し、慎重に検討するよう求めている。

これまでは、原発事故といえば一次冷却水喪失・炉心溶融など原子炉本体に直結する事故が主要なものと想定されてきた。それに加えて、核のゴミの大量蓄積による貯蔵プールでの臨界事故という新たな危険性をこの問題は提起している。

●核燃サイクル継続、原発輸出、「中間貯蔵」推進を狙う「新原子力大綱」策定の動きに反対を

六ヶ所再処理工場はガラス固化工程で行き詰まり、試験の終了を2年延期して2012年としたが、ガラス溶融炉での白金族堆積問題は何も解決していない。今年5月に14年半ぶりに運転再開を強行した「もんじゅ」も、8月に炉内中継装置の落下事故により行き詰まっている。六ヶ所再処理工場と「もんじゅ」の進捗状況を踏まえて2010年頃から検討を開始するはずだった「第二再処理工場」については、原子力委員長が今後10年かけて検討すると9月に発言せざるを得なかった。核燃料サイクル政策はもはや破綻している。

原子力委員会は、原子力政策大綱の見直しを今後一年かけて行うため、12月21日に「新大綱策定会議」の第一回会合を開いた。国の狙いは、核燃料サイクル政策は堅持し、夢の高速増殖炉サイクルにカネをつぎ込み、稼働率アップのために老朽炉にむち打つ長期連続運転と定検の短縮、安全規制の簡略化・形骸化を進め、高レベル廃棄物処分場を探し、さらに原発輸出の推進を織り込むことだ。また、逼迫する原発プールの現状と六ヶ所再処理工場が進まないなかで、「中間貯蔵」という名の核のゴミ捨て場建設推進を目玉にしようとしている。会合で電事連会長は、原発の新增設のためにも、安全規制の効率化と中間貯蔵設置が重要と強調している。

関電は、和歌山県御坊市での「中間貯蔵」建設に向けた動きを始めるに違いない。また九電も「中間貯蔵」探しを開始するだろう。来年以降、「中間貯蔵」反対は反原発運動にとって重要な課題となる。核のゴミ捨て場をこれ以上作らせず、行き場のない核のゴミ問題の矛盾を一層激化・表面化させ、上関などの新規立地や増設推進、さらには老朽炉の長期運転に歯止めをかけていこう。具体的な運動を通じて、脱原発への転換を迫っていこう。

新しい年の1月末には、プルサーマルにとっての大きな焦点が到来する。もし、玄海3号機で燃料の放射能漏れを起こしたのがMOX燃料であれば、MOX燃料の固有の欠陥、とりわけメロックス社製MOXの粗悪性が誰の目にも明らかに浮かび上がってくる。玄海3号はもちろん、伊方3号や高浜3号プルサーマルの停止が運動のスローガンとなる。さらにメロックス社製MOXの使用を予定しているすべての原発で、その使用禁止がスローガンとして浮上する。そのときに向けて全国の運動は連携し、結束して準備にとりかかろう。